ドイツのノルトライン・ヴェストファーレン州における Bewegte Schule の構想と実践

丸　山　真　司

はじめに

90年代におけるドイツのスポーツ指導要領改革の背景には学校スポーツに対する危機意識があり、その中で学校スポーツの存在根拠を示す論議が展開された。その危機意識を生み出した学校スポーツの情況には主として以下のようなものがあったと考えられる。第1に東西ドイツ統一による教育再編の動きである。第2にスポーツや学校スポーツに対する国民の眼差しの変化である。第3にドイツの学校スポーツの方針や条件整備に影響を与えてきた「第2次学校スポーツ促進勧告」が崩れ、実践されていないという問題である。第4に財政状況の悪化によって学校スポーツへの予算が削られ、学校スポーツ条件が悪化しているという問題である。第5に多くの州でスポーツ授業時間数削減問題が進行しているという問題である。第6に子どもの健康・運動問題を含む生活実態の変化が挙げられる（丸山，2009）。以上のような学校スポーツに対する危機意識を背景にドイツではスポーツ指導要領や学校スポーツカリキュラムの改革が行われ、その中でBewegte Schule（以下、BSと略す）の論議が活発に展開されてきた。BSが主張される背景には、第1にスポーツ指導要領改革の中で学校スポーツへの教育学的観点の強調という動きがある。第2に学校スポーツの現状から学校スポーツの多様な意味づけが求められるようになった点である。第3に学校スポーツカリキュラム開発の中で学校スポーツの学校生活（学校プログラム）への組み込みが強調されるようになった点である。第4に学校スポーツの「正統化」、つまり教育学的観点からの説明責任が意識される中で、学校スポーツ教育の対象が「スポーツ」から「運動、プレイ、スポーツ」へと拡大した点である。このような動向の中で、ドイツの各州で様々なBS構想や実践が生み出されていった。

ノルトライン・ヴェストファーレン州（以下、NRW州と略す）は、ドイツの中でも先進的なカリキュラム改革を展開し、スポーツ指導要領改革のイニシアティブをとってきたと言われる。その意味で、NRW州におけるBSの構想と実践はドイツの学校スポーツやスポーツカリキュラムを考察する上で注目に値する。そこで、本研究では、NRW州においてどのようなBSが構想され、どのようなBS実践が展開されているのかについて検討することを目的とする。

1．Bewegte Schule のコンセプト

90年代中頃からスポーツ教育学のテーマになったBSは、もともと座学に運動を取り入れること（bewegten Sitzen）に始まり、それがスポーツ教育改革とともに拡大し、学校教育学的な改革につながっていったと考えられる。90年代ドイツ語圏（ドイツ、スイス）では、それぞれのスポーツ教授学的立場から表1に示されるようなプロジェクト研究が展開され、多様なBSコンセプトが構想された（Thiel他，2006）。BSにおける目標の強調点はその研究や学校の立場によって様々であるが、共通の目標になっていることは学校に多くの運動をもたらすこと、運動空間として学校を捉えること、学校生活全体に動きを作り出すことであり（Regensburger Projekt, 2001）、BSに共通する教授学的根拠は、子どもの発達にとっての運動の意義を強調した点である。BS研究を積極的に展開するMüllerら（2002）は、子どもの発達に寄与する運動の意義を以

表１　Müller (1999), Koessler (1999) の考察に基づく Bewegte Schule のプロジェクトとコンセプトについての概観
(A. Thiel, H. Teubert, C. Cachay (2006))

教科教授学的構想者	コンセプト／プロジェクト	基本事項
Aschebrock (1996)	運動を楽しむ学校	日常的な運動教育、固有の学校プログラム
Dannenmann (1997)	運動空間としての学校	授業原理としての運動、運動する学校生活、活動的な座学と活動的休息
Ehni (1997)	子どもの運動生活と学校の運動教育	授業におけるすべての感覚、運動を伴う学習、運動する休息と教育学的な間、教科の部分的止揚
Funke, W. (1997)	座学空間から運動空間へ	座学空間から運動空間へ、学校内の埋め合わせ機能とレクリエーション機能の最適化
Hildebracht (1997)	運動を楽しむ学校	心理運動学的視点、動きのある授業の組織、全面的学習、活性化する運動空間
Illi (1993, 1995)	運動する学校	動的学習、動的座学、運動的な学校財、住み心地のいい学校の教室、心理的緊張緩和、軽い運動、知覚に関わるスポーツ授業、動的休息
Klupsch, S. (1997)	運動する学校	“運動する学校”の家（８つの要素：クラス空間、運動する空間、休み時間における運動する機会、授業における静けさ、授業外の提供、スポーツ授業・運動授業、すべての関係者の参加、授業におけるテーマに関わる運動
Laging (1998)	運動する学校文化	運動およびレクリエーションの場としての学校施設、スポーツ文化行事、暴れることができる空間、運動して行う（全面的な）学習、運動する学校文化としての学校スポーツ
Puese (1995)	運動する学校――運動教育学的パースペクティブ	Illi を参照：スポーツ授業と運動する学校の境界の明確化
Zimmer (1996)	学校に運動を持ち込む	教科を超えた包括的な学習原理としての運動、多様な運動経験を伴う授業としての教科スポーツ、スポーツ授業における自由な活動、運動する休息、それらを促進する特別な対策、学校生活の一部として運動とスポーツ

下のようにまとめている。①運動は多様な知覚と多様な経験を可能にする。②運動は認知学習を助ける。③運動は社会学習を促進する。④運動は感受性を喚起する。⑤運動は運動発達及び健康的身体発達の前提である。⑥運動は自己肯定感を支える。そして、BS 構想はスポーツ教育から運動を強調する教育へと向かうことになる。

また、NRW 州の学校を対象に BS 研究を展開している Thiel ら（2006）によれば、BS の必要性は、以下のような 3 つの視点からその根拠が示されている。ひとつは、発達理論と学習理論からの根拠であり、そこではとりわけ心理学的パースペクティブ、人間学的パースペクティブ、社会的エコロジカルなパースペクティブから BS を根拠づけている。２つ目は、医学的・健康科学的根拠である。とりわけ医学的・整形外科的パースペクティブ、事故防止・安全教育的パースペクティブ、健康教育的パースペクティブから根拠づけている。３つ目は、生活空間、学習空間、経験空間として学校、文化現象としての学校を構成する学校プログラムの視点からの根拠である。そしてこのようなパースペクティブから具体的な BS 構造のメルクマールを図 1 のように示している。BS はスポーツ授業はもとより、他教科の授業や学習に運動を取り入れる座学やリラクゼーションを求めたり、授業外に動的休息や軽い運動を導入したり、学校生活全体で日常的に運動ができるように施設や設備条件などの環境整備を要求することをその内容として含んでいる。つまり、BS は学校スポーツを教科スポーツという教科の枠内に限定せず、学校生活全体に運動を取り入れる学校プログラム開発や学校づくりにリンクさせて構想しようとしている点にその特徴があると言えよう。

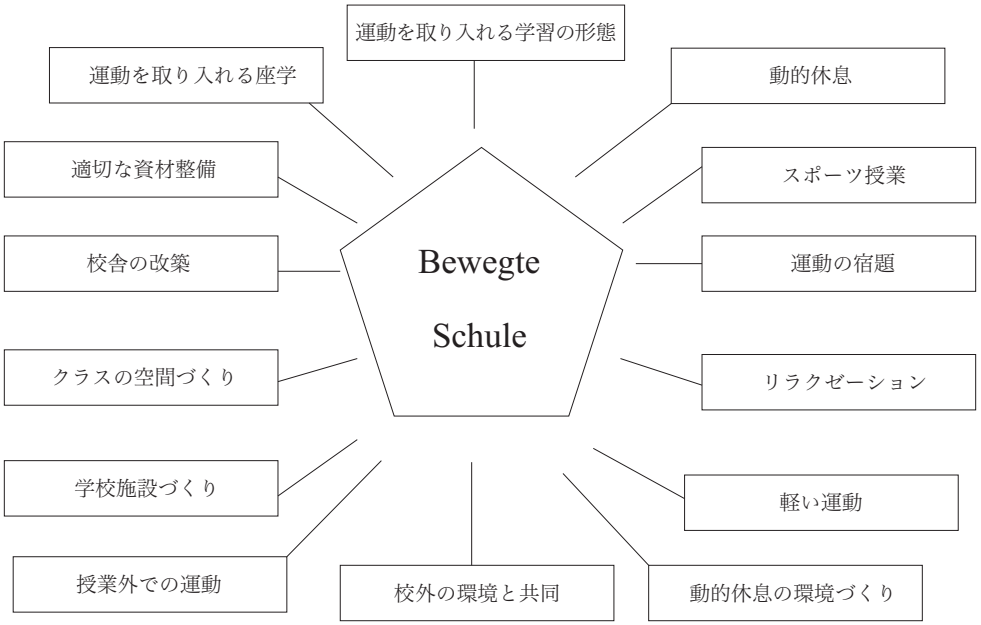

図１　Bewegte Schule の構造メルクマール

（Thiel, A., Teubert, H., Cachay, C. K., 2006）

２．NRW 州における Bewegte Schule 構想 ――「運動を楽しむ学校（Bewegunsfreudige Schule）」

NRW 州ではスポーツ指導要領改革の中で「運動を楽しむ学校（Bewegunsfreudige　Schule）」（以下、BfS と略す）構想が提起される。Müller（1999）と Kössler（1999）の考察に基づいて BS のプロジェクトとコンセプトについてまとめた Thiel ら（2006）は、NRW 州のスポーツ指導要領作成をコーディネートした Aschebrock によって提起された BfS が NRW 州における BS のコンセプトになっていると指摘する。

Aschebrock（1996）は、BfS のコンセプトについて以下のように構想した。彼は、もともと BfS のコンセプトについては、1985年の NRW 州指導要領において「子どもの運動欲求を特別に考慮すること。身体的精神的発達にとって十分な運動が重要であり、それゆえに子どもの学習は全身体や全感覚をともなう学習である。」（KM　NRW, 1985）と指摘されているにもかかわらず、このねらいが多くの小学校において考慮されていないことを確認し、子どもの運動能力不足の実態と子どもの事故保険報告を拠り所として、スポーツ授業に加えて、学校における「日常的な運動時間」を要求した（ss. 132–133）。そして運動教育を全ての教科の関心事とし、学校全体の教育コンセプトの一部分として「日常的運動時間」を全ての教師が取り入れ、スポーツ教師がその中心的な役割を担うべきだと主張した。「日常的運動時間」を主張する彼のねらいは、子どもの発達と制度改変に向けられていた。彼は、授業にリズムをもたせる運動時間の導入、学校生活の中で集中と休息の交代を可能にするための柔軟運動の導入を要求し、子どもの全面発達を目指す生活空間・学習空間である学校では教科を越えた教育課題として運動を重視すべきでると主張した（ss. 134–137）。そして、それぞれの学校で同僚全員によって固有の学校プログラムを作ることが重要であるとした。BS コンセプトの実現は、教科スポーツの存在理由にとって危険性を孕むものではなく、これまで以上に学校スポーツの教育学的意義、信用、影響を増すものであり、学校スポーツは各学校現場で学校生活づくりにおいて他教科との協同や学校プログラムづくりに積極的に組み込んでいく必要があるとした。そのことによって学校教育の中で運動、プレイ、スポーツの意義が確認されるようになると主張した。

こうした主張とその論議の中で、NRW 州のスポーツ指導要領においては、BfS を主導理念として「学校における運動、プレイ、スポーツ」の構造的枠組みが図 2 のように示された。NRW 州のスポーツ指導要領によれば、BfS は以下のような特徴を持つものとして示されている。

すべての生徒にとって必修のスポーツ授業（教科ス

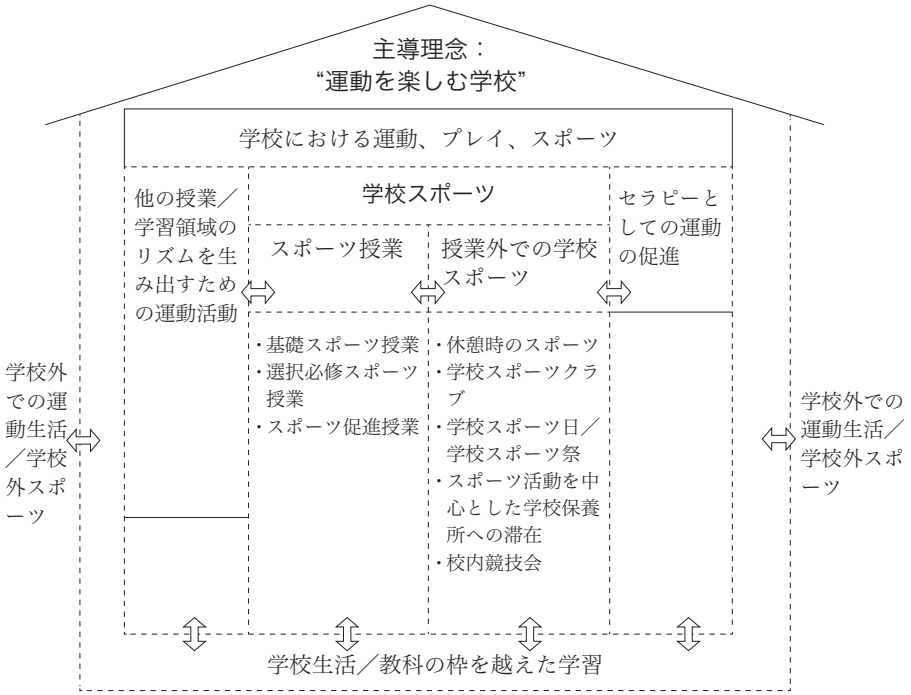

図２　学校における運動、プレイ、スポーツ
NRW 州改訂指導要領にみられる学校スポーツの全体像
（Aschenbrock, 1997, 61）

ポーツ）は学校の運動、プレイ、スポーツの中心である。子どもの発達にとって必要な刺激を与え、社会における運動やスポーツへの参加の基礎をつくる。いかなる学校種にあっても、生徒は基礎スポーツ授業に加えて選択必修授業で経験を深めたり、その授業を通して学校時代に重点的に行うスポーツを決定する可能性をもっている。また生徒の心理運動の促進を目指す授業としてスポーツ促進授業もある。そのような授業にはセラピーとしての（ex. 乗馬セラピーなど）運動を促進するような多様な形態がある。

スポーツ授業と並んで教科外スポーツは、学校での運動・プレイ・スポーツ教育の本質的構成要素であり、その内容として休み時間のスポーツ、学校スポーツクラブ、学校スポーツ祭、学校祭における一連のスポーツ、学校スポーツ競技会、スポーツデイ、遠足がある。教科外スポーツは子どもの自由意思によることが重要である。

スポーツ授業と教科外スポーツは共同で学校スポーツの課題領域を構成する。しかしながら運動は学校スポーツの課題だけにとどまらない。学習生物学の知見に基づけば、運動活動は、学校における生活と学習のリズムづくりに必要である。その時間はスポーツ授業のない日の規則的な運動時間であり、他教科や他の学習領域で自発的に運動しストレスを解消する時間でもある。教科の枠を越えた学習や学校生活づくりに学校スポーツは貢献しているのであり、子どもたちの運動世界や運動生活の重大な変化を考慮して、運動の喜びに満ちた学校生活を創り、また学校プログラムの中に運動、プレイ、スポーツを明確に定める必要性がある。NRW 州ではその意味で「運動を楽しむ学校」という主導理念を掲げている。

（Landesinstitut für Schule und Weiterbilgung, NRW, 1997）

３．NRW 州の学校における BS 実践の実態調査研究

Thiel ら（2006）は、NRW 州の学校における BS 実践の実態調査（48校）を行い、NRW 州における BS 実践の特徴を引き出している。その主な調査結果をここで取り上げてみたい。

１）BS のコンセプトが学校プログラムの構成要素になっているか

子ども数が①180名以下の学校、②181～360名の学校、③361名以上の学校という学校規模別に調査した結果、68.8％の学校が BS のコンセプトを学校プログ

ラムの構成要素にしている。学校規模別で見ると、①が54.5％、②が67.7％、③が100％構成要素になっている。約７割の学校が BS のコンセプトを学校プログラムの中に位置づけており、学校規模が大きくなればなるほど明確に位置づけている傾向になっていると思われる。

２）BS のどのような要素が学校プログラムの構成要素になっているか

以下のように、４つの指標に区分された BS の要素が学校プログラムの中に取り入れられている。

① BS の根拠：運動発達（3.4％）、運動不足（3.4％）、心身の健康（3.4％）、心の補償（3.4％）、攻撃性低下（3.4％）、リラックス（3.4％）、身体経験（3.4％）

②インフラ指標：座るボール（6.9％）、遊び用具（3.4％）、自由空間があるクラス（3.4％）、卓球場（3.4％）、休み時間の遊び道具（10.3％）、校舎の改造（13.8％）

③授業における内容的指標：運動を伴う学習（6.9％）、全日学習（6.9％）、動的休息（23.3％）、水泳授業（1.9％）、スポーツ週間（1.9％）、通常のスポーツ授業（3.4％）、心理運動グループ（3.4％）

④教科外の内容的指標：休み時間のスポーツ（15.4％）、少し動く休み時間（6.9％）、運動する休み時間（5.8％）、スポーツ競技会（3.4％）、ウォーキングデイ（3.4％）、フェスティバルと休暇（17.2％）、スポーツクラブとの共同（3.4％）、共同活動（2.9％）、自転車トレーニング（3.4％）

多くの BS 要素（29要素）が学校プログラムに取り入れられているが、とりわけ中でも高い頻度で取り入れられている要素は、動的休息（23.3％）、フェスティバルと休暇（17.2％）、休み時間のスポーツ（15.4％）、校舎の改造（13.8％）、休み時間の遊び道具（10.3％）である。休息や休み時間をどう活用するかという問題、校舎をどのように改造して使うかという問題に関心が高いと思われる。一方で BS の根拠については高い関心が示されておらず、この点に BS を普及する上での重要な問題が潜んでいるように思われる。

３）BS を学校プログラムに取り入れる際に誰がリードしているか

学校規模別（①180名以下の学校、②181～360名の学校、③361名以上の学校）に調査した結果、①の学校では校長が57.1％、スポーツ教師が28.6％、他の教師が14.3％、②の学校では校長が20.0％、スポーツ教師が75.0％、③の学校では校長が66.7％、スポーツ教師が33.3％であった。小規模校と大規模校では校長がリーダーとなっているが、中規模校ではスポーツ教師がリーダーとなっていることが伺われる。

４）BS についての知識をどのように得ているか

BS についての知識獲得の方法で主流なものは、「校外での研修」（79.6％）、「自分自身で」（70.6％）である。他は「教師や学校の会議」（19.6％）、「校内研修」（19.6％）、「教師試験」（13.7％）、「大学」（11.8％）であった。教師の多くは、校外研修か自己学習によって知識を得ており、それぞれの学校内で組織的に研修や学習が行われていない状況があると考えられる。最も頻度の高かった「校外での研修」において多くの教師は、地方自治体の学校課による研修（64.7％）から知識を得ているものと考えられる。他ではスポーツ競技連盟の研修（15.7％）があげられている。研修内容の充実とともに、校内での同僚たちによる研修システムの確立が重要課題になろう。

５）BS を行う時間帯・活動形態（学校規模別）

学校規模別（①180名以下の学校、②181～360名の学校、③361名以上の学校）に調査した結果、以下のような傾向がみられた。

学校規模に関わりなく多くの学校で BS が行われている時間帯・活動形態は、「行事の時間」（①84.6％，②96.8％，③100％）、「授業活動中」（①76.9％，②100％，③57.1％）と「半日を使った活動」（①67.2％，②58.1％，③85.1％）であった。学校外の組織と連携した行事、他教科の授業の中に組み込む活動、特別デイとして設けた半日活動が BS の実施形態として主流になっていることが伺われる。

６）BS の観点から通常クラスにはどのような有効な道具があるか

通常のクラスに BS にとって有効な道具として置かれているのは、椅子、調節できる机、作業机、バランスボール、くさび形クッション、クッション・マット、ソファ、絨毯の床、遊び道具、調度家具であった。その中で比較的設置率の高いものは、調節できる机（63.5％）、くさび形クッション（44.2％）、バランスボール（40.4％）、クッション・マット（36.5％）、調度家具（36.5％）であった。

７）休み時間をどう作り、活かそうと考えているか

この質問に対する答えとして頻度の高い順に挙げれば、「朝食の時間と運動の時間を分離する」（100％）、「道具の貸し出し」（88.5％）、「道具の持ち込み」（59.6％）、「自由な運動活動の提供」（41.2％）、「関節

柔軟運動の提供」（14％）、「生徒とつくる」（9.6％）、「体育館の開放」（7.7％）、「親とつくる」（1.9％）である。すべての学校において朝の休み時間において「朝食の時間と運動の時間を分離」してBSを行うことが重要な課題となっていると考えられる。また、休み時間には手軽な道具を使って活動することが意識されていると考えられる。

８）教科外における運動機会の提供

教科外における運動機会の提供について頻度の高い順に示せば、「スポーツ競技会」（78.4％）、「運動に重点を置いた学校祭」（76.5％）、「ダンス／演劇」（66.7％）、「AGs」（58.8％）、「ゲームフェスティバル」（52.9％）、「運動に重点を置いたクラス旅行」（39.2％）、「運動に重点を置いた学校ハイキング」（21.6％）、「運動に重点を置いた学校修学旅行」（2.0％）である。校内のスポーツ競技会、学校祭的なもの、旅行などの年間の学校行事の中で意識的意図的に運動機会を提供しようとしていることが伺われる。

９）学校外との共同

多くの学校が学校外と共同していると答えている（70.2％）。学校規模別（①180名以下の学校、②181～360名の学校、③361名以上の学校）に調査した結果、学校規模に関わりなくほとんどの学校で「中庭の開放」（①100％，②93.5％，③100％）、「スポーツクラブへの推薦」（①100％，②80.6％，③100％）を学校外との共同として行っていると答えている。また、「フェスティバルや休暇時の場所提供」（①66.7％，②69.0％，③83.3％）も学校外共同として多くの学校で行われている。「スポーツクラブから指導員派遣」については、中小規模校ではほとんど見られないが、大規模校においては比較的多く取り入れられているものと思われる（①16.7％，②16.7％，③60.0％）。

４．「運動を楽しむ学校（Bewegungfreudige Schule）」NRW2004顕彰におけるモデル実践校

NRW州では、2004年に州の学校スポーツの理念であり、また州のBSの主導理念になっているBfSの実践を普及させるため、「運動を楽しむ学校（Bewegungfreudige Schule）NRW2004」という顕彰を行っている。この顕彰の目的は、BfSの成果を収めている学校を表彰して動機づけ、その成功した効果のある方法を広め、学校開発プロセスの質を高めるためであるとされている。

NRW州において168校がこの顕彰に応募した。応募した学校種の割合は、小学校（51％）、特別支援学校（18％）、基幹学校（８％）、総合制学校（８％）、ギムナジウム（７％）、実科学校（７％）であった。小学校が圧倒的に多く、BSへの関心と実施が小学校中心になっていることが伺われる。その中から優秀校として以下の学校が表彰された。以下、これらの学校のBfS実践を取り上げてみたい。

１）Ahle小学校

Ahle小学校、強制移住者と亡命申請者のための暫定地域にある田舎の小学校である。児童数84名、教師７名（その内、スポーツ教師２名）。とりわけ外部へは、親の会、後援会、幼稚園、大学ゼミ、教会、スポーツクラブ、消防署、演劇教育工房、学校の青少年プロジェクト（健康食品）、学校と会社の共同（基金）に開放され繋がっている。

BSに関わって、学校における運動・プレイ・スポーツの目標は「頭、心、手を使って学習すること」としている。授業のある日には、子どもの学習と運動欲求に基づき、教師の裁量で授業の始まりや授業の合間に動的休息（運動を伴う休息）を取り入れて生活リズムを作っている。それらはすべての教科で行っている。さらに学年を超えた活動として、ダンス、共同奉仕活動、スポーツ促進授業、学校プロジェクト、スポーツ祭、学校祭も行っている。同時に運動教育に重点を置いた、指導要領に従うスポーツ授業やスポーツ競技会、連邦青年祭にも参加している。

「運動楽しむ学校」づくりとして、当校において最も注目すべき実践プロジェクトは、アフリカの子ども緊急支援のための学習を促進する太鼓コンサートに参加する「子ども–世界プロジェクト」である。もう一つは、教育的視点から「大きなカオスゲーム」（運動課題を考えるスポーツ）という“ゲーム＆スポーツ祭”に参加したことである。

２）Bonn-Beuel総合制学校

当校は、全日の学校活動を行っており、1350名の生徒、125名の教師が在籍している（その内スポーツ教師の資格を持つ教師が25名）。当校での生活と学習の特徴は、多様な人間を統合し、個々人の能力や学力を伸ばすことである。社会的参加と学びの喜びが自立的、集団的にコンフリクトを解決する能力を備えた人間を育成すると考えている。個々人の学習や学力に応じて７学年から多様なコースが設けられている。数学と英語は７学年から、ドイツ語、化学、物理学においては９学年から多様なコースが設けられている。外国語、自然科学、芸術教科は７学年と９学年で選択必修

になっている。他の教科（ex. スポーツ）はクラス合同の授業で行っている。

当校における運動・プレイ・スポーツに関わって、学校固有の教科として 5 学年で健康教育を位置づけている。教科の中で、また休み時間や昼休みに運動を提供をしている。学校内の共同活動領域ではスポーツクラブと共同して子どもを育成している。また、指導者補助員を育成したり、多くの学校スポーツ競技会にも参加している。

当校で最も成功した実践は、国際スポーツイベント（アテネマラソン）への参加、サッカーワールドカップにおいて「ワールドカップ学校」としての参加、及び障がい児と健常児の統合授業である。

3）Jakob-Moreno 学校

学習障がいのための学校であり、生徒数280名、教師数31名、非常勤教師 4 名、スクールソーシャルワーカー 1 名、共同職員 4 名、スポーツ教師 5 名、運動療法士 1 名で構成されている。

運動・プレイ・スポーツに関わって、当校では知覚と運動が人間の学習の拠り所と考えている。運動を通しての学習が当校の重要な教育的視点であり、学校プログラムの重点である。

まず、一般の授業においても運動を提供している。基礎学年のスポーツ授業や水泳授業においては心理運動（6 時間）を、上級学年においてはフェルデンクライシスの体づくりやコミュニケーショントレーニングを行っている。運動を指向した共同活動では、フットボール（低学年、上級学年、女子）、太鼓、水泳、カヌー（低学年、中級学年、上級学年、競技グループ）、フリスビー、ボールプレイ、縄跳び、自転車、ヨガ、ダンスを行っている。

セラピーでは、馬術や水中での運動を行っている。その他、修学旅行、ウォーキングデイ、スポーツ学校への参加を促している。

また動的休息も行っているし、SSF ボンカヌースポーツクラブ、TUS サッカークラブとの共同も行っている。

当校のベスト実践は、定期的に開催している「ダンス劇」である。また生活教育的な視点から、NRW 州のスポーツ連盟主催のスポーツにおける文化活動に参加したり、運動に重点を置く修学旅行も催している。

4）Clarholz Wilbrand 学校

生徒数304–342名、クラス担任教師12名、教科専門教師 4 名、スポーツ教師 7 名である。当校における運動・プレイ・スポーツの主導理念は、生活のために相互に活動し運動することであり、学校プログラムにおいて運動・プレイ・スポーツは重要な構成要素となっている。例えば 1 年間を通して、ゲーム＆スポーツ祭、ダンス祭、校内バスケットボールトーナメント、校内スポーツクラブなど様々なイベントを行っている。そこでは特に親と子どもの学校プログラムとして親の関わりを強調している。

学校生活における運動・プレイ・スポーツでは、「運動を楽しむ親子“星旅行”」（2005年 6 月）、運動を楽しむ空間としての「校庭造り」の後援、幼稚園との共同で 1 学年における学校生活のリズム化を行っている。

特に当校の優れた実践としては、まず第 1 に親の参加によるゲーム＆スポーツ祭があげられる。毎夏学校では州の青年祭とスポーツ祭を定期的に交替して行っている。ゲーム＆スポーツ祭は、子どもによって計画、運営される。各クラスは一つのゲームかスポーツ活動を必ず準備する。午前中は、クラスの親によって会場づくりがサポートされ、各々の子どもは、走カードを持って12のプレイ会場を楽しみながら走って探し、手際よさを競う。当年は「缶ポックリ走」、「インディアンゲーム」、「卵運び走」など多様なゲームを取り入れ、すべての子どもが表彰されるようにした。午後には、後援会による「スポンサー走」にすべての子どもが参加する。後援会から得たお金は運動を楽しむ空間としての校庭の作り替えに使われる。

またスポーツ週間の 3 日を「知覚――聞く・感じる」をテーマにして、クラス毎に音の庭、足踏み場、リラックスルーム、マッサージルームに行って活動する。昔ながらの休み時間遊びを行い、低学年に対しては飛び跳ね用の「跳び箱」や休み時間に使う道具を準備している。また、“特別日”の午後には乗馬クラブを招待し馬に乗って楽しむこともある。

Wilbrand 学校のダンスパーティは長い歴史を持っている（20回）。12の学校が集まり、フォルクローレ、ステップエアロビクス、パントマイム、ヒップホップ、ジャズ＆ポップを行う。小さい子ども時代に多くのリズムと運動を伴った音楽を生活の中で経験することが目的である。カフェテリアや果物や野菜スタンドは後援会によってサポートされる。

5）Jürgens Hof 基幹学校

Jürgens Hof 基幹学校は、外国人移住者や生活が困難な家庭の子どもが登校している学校であり、210名

の生徒と18名の教師（その中に僅か3名のスポーツ教師）で構成されている。

運動・プレイ・スポーツに関わっては、生徒の自然な運動欲求を満たす空間を与えるよう努力している。子どもたちに必要な経験をさせるために、学校はすべての子どもが運動の楽しさを得ることができるようにスポーツ活動領域について努力している。当校は、学校とは学習の場所であるばかりでなく生活の場所であり、かつ気持ち良く過ごせる場所と捉え、多様なスポーツ共同活動、スポーツ祭、スポーツ・デイを効果的に行っている。学校プログラムは、教師、ソーシャルワーカー、親、子ども、クラブと共同でネットワークを作っている。

教師は、様々な教科の授業で45分椅子に座っていることが難しい低学年の子どもたちに対して、運動欲求に適した運動を提供している。例えば、授業中生徒の集中力が切れたとき、短い運動ゲームを入れる。それは新しいスポーツ指導要領の内容領域「滑る、乗る、回る」スポーツに類するものである。

学校スポーツでは身体バランスが強化されている。身体バランスがよくないと精神的なバランスも機能しない。当学校では8つの台車を持って、バランス能力、反応能力、コーディネーション能力を高めている。たとえば台車に座ったり、寝たり、跪いて走ることによって、知覚能力を高め、運動経験を拡大するような体験をとりわけ重視している。バランス用具の開発によって、子どもは動いたりバランス能力を高めたりすることを学ぶようになる。これらは心理や身体における健康づくりに寄与している。

当校のベスト実践として、教科を超えた授業におけるカヌープロジェクトがある。それは8–9学年において選択授業として自然科学－技術－スポーツとの関連領域で2週間連続のアウトドアプロジェクトである。ライン川の水路を使い800mのコースを作っている。これは新スポーツ指導要領の内容領域「滑る、乗る、回る」における水辺スポーツに合致している。このカヌープロジェクトは、最初には技術授業において3つの作業チームごとにカヌー小屋を作るところから始まる。この作業では一般社会の職業階層間で生じるようなコミュニケーションを効果的に行うようになる。またこのカヌー小屋作成プロセスではボートを作る知識を獲得することになる。予算は300ユーロ以内で、校内にボート小屋を作る。3月から6月初旬までカヌー小屋づくりは進められる。その夏から障がいを持った人も参加するカヌープロジェクト授業週間が始まる。翌年5月、自転車－マラソン－カヌーを行う第1回「トライアスロン大会」が開催された。

6）Dieckerhoffstrasse 小学校

Dieckerhoffstrasse 小学校は Wuppatal にあるキリスト系小学校で、児童数203名、8クラスの学校である。校長、12名の教師、秘書で構成されている。その内3名の教師はスポーツが教えられる教師であり、授業補助や水泳の授業を引き受けている。

運動・プレイ・スポーツに関わっては、学校プログラムの中で「学校においてもっと運動を」をテーマにし、すべての子どもに日常的な運動時間を確保することの必要性を主張している。学期の始まりにアクティブな意味ある休み時間づくりをしたり、すべての教科を運動を楽しむ授業と位置づけ、教科授業の中でリラックスしたり心を静める練習を取り入れている。1–2年生のスポーツ授業は週1回＋運動経験の少ない子どものための促進授業を行っている。3–4年のスポーツ授業は、新スポーツ指導要領に基づき、週1時間のスポーツ授業と2時間連続のスポーツ授業あるいは水泳を行っている。学校の施設は、子どもの運動欲求を考慮して作られている。学校の横と裏には子どもたちが自由に遊んだり跳ね回ったりすることができる校庭があり、校舎の地下には色々な遊びや運動を選ぶことができるようにボールゲーム場、鉄棒、ロッククライミング、卓球台、跳び箱が装備されている。当校では運動を楽しむ子どもたちのために、放課後にはスポーツクラブと共同し、5つの「生徒の自主的スポーツ共同活動」＝ハンドボール、サッカー、水泳、体操、ダンスを設けている。これらの活動は学校クラブによって支えられている。

注目すべき実践のひとつは、Sperlich サーカス（www.Circus-Sperlich.de）との共同である。2003年5月に10日間、Sperlich サーカスファミリーを招待した。校内に親や消防署の力を借りてサーカステントを立て、「サーカス村」と名付けた。プロジェクト週におけるウィークデイは、2時間のサーカスプログラムを行い、週末は6つのセッションを行った。主な出演は子どものみである。このサーカスプロジェクトは、ハラハラドキドキする体験であり、学校プログラムづくりにおいて教師と親が一致して採用したものである。

二つ目は、「アフリカ・デイ」である。2004年5月に「アフリカ・デイ」週間を設けた。このプロジェクトはトーゴの“Deka Wowo”クラブの寄付によって行

われた。多くのグループで、アフリカの子どもたちがどのように生活し、遊び、何を食べ、何を着て、どんなスポーツしているかなどを教師、親とともに考え実践した。土曜日に「アフリカ・デイ」イベントを行い、子どもたちが周囲100 mの観衆の円を走りながら寄付を集めた。寄付は約5000ユーロ集まり、トーゴに送った。このプロジェクトによってトーゴの子どもたちとの交流が可能になった。

7）Martin-Lutter 学校

Martin-Lutter 学校は、1 年〜10年までの13クラスある学習障がい児のための学校であり、生徒数190名、教師17名、その内 4 名がスポーツを担当できる教師である。

運動・プレイ・スポーツについては、運動は学習障がい児にとって学習の前提であり、彼らの欲求であると捉えている。そして以下のような「運動についての４つの中心コンセプト」を設定している。

①授業における運動；学習障がい児は多くの知覚チャンネルが欠損しており、文字の学習においてはただ見る、聞くばかりでなく、文字をこねたり、切ったり、貼ったり、文字を持って歩くような促進プログラムを展開している。つまり、手と足を使った学習が原則となる。

②休み時間のスポーツ＝理念「自由な学校」；この学校の休み時間が興味深い。例えば、フロア上でサッカーゲームが催される。12〜16歳の子ども20名程度は休憩ホールにある 2 台の卓球台の周りを走って回ったり、10人ほどは校内でバスケットボールをしたり、 8 人ほどは二つのゴミ箱をゴールにして簡易サッカーを楽しんでいる。女の子は縄跳びをしたり、体育館ではドッジボールを楽しんでいる。休み時間は、部分的には指導を行うが、「自由な学校」理念に示されるよう自由にスポーツを楽しませている。この時間には殴り合いやけんかは起こらないと言う。多くの生徒の運動欲求とスポーツ活動が満たされ、社会的プロセスが育まれる。

③教科としてのスポーツ；学校スポーツは定期的に３時間設定している。教科スポーツは学校の体育館と地域のスポーツ場、プールを使う。一方、学校チーム対抗の学校対抗競技会（サッカー、バスケットボール、バドミントン）も行っている。陸上競技は連邦青年競技会に参加し、校内ではストリートボール大会も行っている。

当校の注目すべき実践の一つに「競技大会」がある。 7 〜10学年のすべての生徒がドッジボール、ストリートボール、卓球、サッカーに参加する。また、二つ目は「カトリック教会との共同フィットネス」である。15歳以上の生徒は、カトリック教会にあるフィットネス場において教師の下でフィットネスを行う。三つ目は「自転車」である。中等段階の生徒は週に一回、警察の援助の下で自転車を練習するというものである。

以上、NRW 州における BfS の実践についてみてきた。NRW 州における BfS は、小学校、特別支援学校、基幹学校、総合制学校、ギムナジウム、実科学校と多様な学校種で実践され、その中でもとりわけ小学校での実践が圧倒的に多く、BS への関心と実施が小学校中心になっていることが伺われる。「BfS NRW 2004顕彰」で表彰された 7 校における BfS の実践例に見られるように、BfS はどの学校においても、学校や子どもの生活の中に意図的に、積極的に運動を取り入れることをねらいとしている。そして、それぞれの学校の BS における活動内容の重点には濃淡はあるものの、共通することはスポーツ授業、他教科の授業、休み時間、教科外活動、学校生活、地域と連携した活動の中で BfS が展開される点である。つまり、BfS は教科や学校の枠内にとどまらず、地域の中に広がる活動として実践されている。とりわけ、表彰された学校で注目実践として紹介されている実践はユニークな実践が多い。たとえば、「国際スポーツイベント」「ワールドカップ学校」への参加、「ダンス劇」、「州のスポーツ祭」への参加、「12校共同のダンスパーティ」、「カヌーイベント」、「サーカス団との共同サーカスプロジェクト」、「アフリカ・デイ」、「カトリック教会との共同フィットネス」など、保護者や地域とつながるイベントとして楽しめる BfS が組織され実践されている。この背景には、BfS や学校スポーツの正統性を学校内外に訴えようとする意図があるように思われる。

おわりに

本稿では、90年代以降ドイツのスポーツカリキュラム改革が展開される中で、スポーツ教育学の重要なテーマとして論議、実践されてきた BS に着目し、とりわけ NRW 州の BS 構想と実践について考察した。

BS は、子どもの生活に多くの運動を取り入れるため、学校を運動空間と捉え、学校生活全体で日常的に運動ができるようにすることを主要なねらいとしてい

る。そして、BS は教科スポーツという教科の枠内にとどまらず、他教科、休み時間、学校生活全体に運動を取り入れる学校プログラム開発や学校づくり、さらに地域の活動とリンクさせて構想しようとしている点にその特徴がある。その背景には BfS および学校スポーツの「正統化」問題があると考えられる。

NRW 州では、BfS が BS のコンセプトになっており、BfS を実践している約 7 割の学校がそのコンセプトを学校プログラムの中に位置づけている。また、小学校、特別支援学校、基幹学校、総合制学校、ギムナジウム、実科学校など多様な学校種で、多様な活動内容を持つ実践が展開されていることが明らかになった。BS としての BfS が学校スポーツカリキュラム開発につながる積極面は、ブッパタール大学研究グループ（Wuppertaler Arebeitsgruppe, 2008）が指摘するように、BfS 開発が学校づくりプログラムに調和よく統合され、「運動・プレイ・スポーツ」が学校での共同的な関心事となったこと、学習活動にとっての運動の存在価値が共感的に評価されたことであろう。一方、BfS 開発には、①「運動・プレイ・スポーツ」が学校プログラムに具体的にかつ適切に根付いていない、②BfS を担う人材不足が BfS 開発を妨げている、③学校条件の不十分さが BfS 開発を困難にしている、④ BfS 開発が学業主要教科の優位性との比較の中で苦悩しているという問題点も存在する。BS が学校スポーツカリキュラム開発の中に正当に組み込まれるためには、上記の問題点と、BS の目的論と関わる運動と教育の関係（運動のもつ教育的機能）、運動とスポーツの関係（運動の持つ文化機能）について、スポーツ教育学・教授学の立場から理論的及び実践的に明らかにしていく必要があろう。今後の研究課題である。

文献

Aschebrock, H. (1996): Tägliche Bewegungszeiten im Unterricht im Kontext eines bewegungsfreudigen Schuleprofils. Kindheit und Sport—gestern und heute. Schriftenreihe der dvs. Bd. 76, 131−138

Aschebrock, H. (1997): Bewegung in Schulentwicklung! Schulentwicklung ohne Bewegung? Sportpädagogik, 21(4), 9−12

Landesinstitut für Schule und Weiterbilgung, NRW (1997): Curriculumrevision im Schulsport-Vorschläge zur Curriculumrevision im Schulsport in Nordrhein-Westfahfalen, Werkstattberichte 3

丸山真司（2009）：「ドイツにおける学校スポーツカリキュラム開発と Bewegte Schule」、日本教科教育学会第35回全国大会論文集、pp. 51−52

Ministerium für Schule, Wissenschaft, und Forschung des Landes Nordrhein-Westfalen (1999): Ramenvorgaben für den Schulsport NRW, Richtlineie und Lehrpläne—Sport

Ministerium für Stadtbau und Wohnen, Kultur und Sport des Landes Nordrhein-Westfalen (2004): Landesauszeichnung “Bewegungsfreudige Schule NRW 2004”—Dokumentation

Müller, C., Petzold, R. (2002): Bewegte Grundschule—Ergebnisse einer vierjährigen Erprobung eines pädagogischen Konzeptes zur bewegten Grundschule, Academia Verlag

Regensburger Projektgruppe (2001): Bewegte Schule—Anspruch und Wirklichkeit, Verlag Hofmann Schorndorf

Thiel, A., Teubert, H., Christa, Cachay, C. K. (2006): Die “Bewegte Schule” auf dem Weg in die Praxis, Schneider Verlag Hohengehren

Wuppertale Arbeitsgruppe (2008): Bewegung, Spiel und Sport im Schulprogramm und im Schulleben-Qualitaet bewegungsfreudiger Schulentwicklung, Differenzen zwischen Anspruch und Wirklichkeit, Meyer & Meyer Verlag, 161−166